

清流の復活期待

地元漁業者

やっとかつての清流を取り戻せる。荒瀬ダム建設から約60年、球磨川のシンボルともいえるアユの不漁に悩まされてきた地元漁業者らは、完全撤去による清流復活に期待を寄せる。

球磨川漁業協同組合は毎春、河口付近で捕獲した稚ア

ユをダムの上流まで運んで放流している。稚アユの捕獲量は一時100万匹以下に落ち込んだが、今年は約300万匹まで回復したという。きっかけはダム撤去を決めた熊本県が2010年3月、水門を開放したことだった。

ダム建設前ほどではないが、自然に近い流れが戻ったことで「水質は大幅に改善した」と大瀬泰介組合長(75)。

球磨川は大型のアユが生息することで知られ「完全撤去でさらにアユが戻るはず」と力を込める。

県の環境モニタリング調査でも河川環境の変化が確認された。水門開放後、流れの回復で砂州が出現し、かつての生態系が復元される兆しが見られるという。

一方、工事で出る濁りの影響を心配する声もある。川の中の作業はアユの漁期を避け、冬場を中心に行う計画だが、河口域ではこの時期にアオノリ漁が行われる。

県は水の浄化対策も取るとしているが、アオノリ漁師らでつくる「やつしろ川漁師組合」の毛利正一代表(71)は「やっと長質なノリが採れるようになり、喜んでいたので」と顔を曇らせた。

荒瀬ダムの経過

- 1955年3月 ▶ 荒瀬ダム完成
- 2002年12月 ▶ 潮谷義子前熊本県知事が撤去表明
- 03年7月 ▶ 専門家や住民による撤去方法検討委員会が初会合
- 08年6月 ▶ 蒲島郁夫知事が撤去方針を凍結
- 11月 ▶ 撤去費確保が困難だとし知事が存続を表明
- 10年2月 ▶ 12年度からの撤去を前提に県が水利権延長を国に申請
- 3月 ▶ 地元漁協などの反対を受け、県が水利権延長申請を取り下げ、発電を停止し、水門を開放
- 12月 ▶ 12年度から6年間で撤去を完了する計画を県が公表
- 11年9月 ▶ 県が撤去許可を国に申請
- 12月 ▶ 国が許可
- 12年9月1日 ▶ 撤去工事に着手